

ねばなるまい。このように李成桂家門は、半島南部からの流民を支配下におき、彼らを使役して農地経営、特に水田の開発・経営を大規模に行なっていたのである。

李成桂家門が半島南部からの流民を動員して開発・経営した水田は、李成桂による王朝創業を支える重要な経済基盤となったと考えられるが、その歴史的な意味はそれにとどまるものではない。南方からの高麗流民による水田の開発・耕作の展開は、東北辺境地域に半島南部の営農様式、生活様式がもちこまれたことを示すものでもある。そしてこのことが、朝鮮王朝による東北辺境地域への郡県支配の確立において、重要な史的前提をなしたことは否定できないと思われる。

〔西洋史部会〕

中世スペインにおける異教徒間休戦協定の実態

黒田 祐我

報告者は、まず中世スペイン史における問題を概観した。中世スペイン史における最大のテーマはキリスト教、ユダヤ教そしてイスラームという二つの宗教の融和と軋轢でありつづけ、先行研究の多

くは、「レコンキスタ（再征服運動）」、十字軍運動、聖戦（ジハード）概念、他者認識などの問題を優先させている。ここでの諸問題は必然的に宗教あるいはナショナリズムの重要性の是非を議論する場となってきた。中世盛期（一一世紀から一三世紀）における研究と中世後期（一三世紀から一五世紀）における研究との間に存する、質的、量的に大きな差異を指摘した上で、中世後期カステール王国とナスル朝グラナダ王国との間の国境地帯に関連する近年の研究状況を整理し、「辺境」への眼差しからもたらされるであろう豊かな成果について強調した。本報告はその手始めとして、当該歴史的「辺境」地帯における「戦争と平和」という現象を、王国間休戦協定の実態、そして境を跨いで頻発する地域間交渉の実態という重層的な観点から分析を試みたものである。

まずは、中世後期におけるカステール王国とグラナダ王国との間に横たわっていた「辺境」を巡る政治・軍事状況を時系列順に概観した。史料上においても、そしてそれに則って主張する研究者の意見も、両王国間の関係は二つに大別が可能である。すなわち、公的な戦争期間と休戦期間である。研究史上においては、「戦争遂行型社会（A Society Organized for War）」すなわち、近代アメリカに於ける西部開拓時代の社会との類似性、つまりは、常時臨戦態勢に晒され、恒常的な略奪行為に適応した、高い流動性を持つ社会としてキリスト教諸国社会は位置づけられてきた。しかし実際に両国間の公的な戦争期間は非常に短く、他方で休戦期間が圧倒

的多数を占めているのである。近年の研究者らは、この史料知見に基づき上記の社会モデルに對置する形で「平和遂行型社会 (Una sociedad organizada por y para la guerra)」を提示しはじめている。

次に、両国間の関係の多くを定めたとされる休戦協定 (*tratado de tregua*) を巡る交渉から締結に至るまでの経緯、そして協定文書の内容の分類と時代的変遷に関して総括した。史料残存状況を概観した後、休戦協定の交渉を両王国の利害調整の場として位置づけた上で、その模様を示した。双方の合意を得られた段階で、バイリಂಗual証書、すなわち中世カステイリヤ語とアラビア語で「同じ内容」を併記した文書を二通作成する。双方の王が署名し、二通のうちの一通をそれぞれ保管する。この上で休戦協定が締結された旨を各自の王が「辺境」各拠点へと伝達し、その公示 (*pregón*) と遵守を命ずることにより、休戦状態へと双方の王国が置かれることとなったと考えられる。休戦協定の条項の第一は、当然ながら休戦期間の決定である。第二は臣従に関する条項であるが、グラナダ側の貢納金 (*parias*) の支払を条件に成立する場合が多い。第三に、交易関係、人的交流関係の保障に関する条項である。「禁止品目 (*cosas vedadas*)」として、一般的に馬、武器そして麦をカステイリヤから持ち出すことを禁じているが、他の品に関しては一定額の関税支払いにより、商人の身体、持参する物品の安全が保障された。そして第四に、「辺境」に於ける紛争解決手段の規定であ

る。同条項は、休戦協定締結にもかかわらず、侵犯行為が頻繁に生じていたことを間接的に物語っており、と同時に、双方の為政者による休戦維持の意志表示でもあり得た。

最後に、当事者たる「辺境」の民の動向に関して、現在知りうる限りの情報を提示した。王国間の休戦協定の締結、そして公的な戦争に翻弄されつつも、彼らは彼らなりの情報網と利害関係に依じて、地域間でのミクロな和平協定、越境紛争を繰り返していた。この結果として成立した独自の「辺境」における慣習に則り、必ずしも王国間の大局的な関係とは一致していなかったのである。王国単位での関係というマクロ・レヴェル、「辺境」というミクロ・レヴェル、この二つの層をを重ね合わせて眺めた場合、当の「辺境」は、「戦争と平和」を能動的に、流動的に、そして日常的に行使し続けたという、もうひとつ別のダイナミズムが明らかとなるのである。「辺境」の民は、どのような情報を収集し、いかなる関係を「宗教的・文明的な境」の向こうと構築しようとしていたのか。これを具に描写することこそが今後の課題であり、その過程で必然的にこれまでの中世スペイン史で議論されてきたテーゼ、「宗教的寛容か、あるいは不寛容か？」への大幅な見直しを要求することにも繋がるかと考えている。